1．西欧中世史料論の現在　—序論として—

岡崎 敦

はじめに

20 世紀の末にいたり、史料学、あるいは史料研究という一見地味な領域が、歴史学研究の前面に浮上してきたように見える。本共同研究は、こと自体の意味を探るのではなく、歴史学の現場で蓄積されてきた成果を検討することを目標とするが、これに先立って、簡単に状況を整理することも無意味ではないであろう[1]。

史料論への関心の高まりは、思うに、歴史学の内外、学問状況全般の変容を背景としている。歴史学「外」的状況としては、従軍慰安婦問題や沖縄集団自決問題をはじめとする、いわゆる歴史認識問題の影響が大きい。これに連動して、歴史学の実証基盤の問題視が構築主義者たちから提出されたことが、歴史情報の認識問題を俎上にのせ、「素朴実証主義者」がその無知と楽観主義を揶揄された[2]。

他方、歴史学「内部」においても、急速な問題関心の変容が進行していた。20 世紀末のキーワードは「記憶」や「表象」であり、いずれも「歴史像」の「内容」ではなく、その構築の過程や表現に関心を寄せていた。「全体史」や「構造史」を標榜し、しばしば大理論による歴史現象の意味付けに傾注していた以前の歴史学にかえて（「全体主義の時代」と呼ぼう）、「読み取り」の歴史学が流行するに至ったのである。さらに、このような「主観性」への着目は、歴史学自体の営みの省察を導かずにはおかず、歴史家の立場性が強く意識されることになった[3]。

最後に、他領域の諸学問からの影響である。とりわけアメリカ学界においては、早くから人類学や社会学の関心や方法論の歴史学への導入が見られたが、現在では、これに加えて、意味論や語用論をはじめとする理論言語学や受容理論、さらには現象学・解釈学までもが意識されるに至っている[4]。重要なのは、これらの「外部理論」が、かつてのように単に「解釈の参照系」として「利用」されるのではなく、歴史情報の処理という方法論的レ

---

[1] 全般的な状況整理については、以下の拙稿も参照。岡崎敦「西欧中世史料論と現代歴史学」（『九州歴史科学』第 31 号、2003 年、1-20 頁）、同「いまなぜメディア研究か—問題関心の背景と研究の展望」（『歴史学研究』増刊号、820、2006 年、167-169 頁）、同「西欧中世史料論と日本学界—いまなにが問題か」（『西洋史学』第 223 号、2006 年、43-56 頁）。

[2] 膨大な業績があるが、なかでも、上村忠男他編『歴史を問う』シリーズ（岩波書店、2001-2004 年、全 6 巻）は、所収論文はもちろん、編集スタイル自体が議論の現状を物語っている。

[3] 歴史学研究会編『歴史学における方法的転回（現代歴史学の成果と課題 1980-2000　I）』（青木書店、2002 年）所収の諸論文を参照。歴史学における「立場性」についても多くの発言があるが、なかでも成田龍一の一連の仕事は、歴史学方法論とその実践という意味で参考になるところが多い。最新の論文集として、成田龍一『歴史のポジショナリティ』（校倉書房、2006 年）。

[4] Cf. SPIEGEL, G., ed., *Practicing history: New directions in historical writing after the linguistic turn*, New York, 2005.

ヴェルで受容され始めていることであろう。

それでは、歴史学における史料論は、歴史哲学やコミュニケーション理論とは、どのような関係にあるのだろうか[5]。歴史家が（おそらくは「徴候」として）把握するかぎりでの過去の痕跡を「史料」と定義すれば、史料研究とは、史料現象と、それを意味あるものとする広い意味でのコンテクストの研究（コードとコミュニケーション）ということになろう。とりわけ、歴史学が取り扱う対象は、時空において遠く離れた他者であり、二重の意味で、認識や解釈の意味自体が問われる。しかしながら、歴史学は、歴史現象認識の過程を自己省察して、一般理論を構築することを目標とするのではなく、具体的な現象を出来るだけ妥当なかたちで分析し、その性格を特定するという、すぐれて経験的な学問であり、方法論もあくまで現場の経験によって洗練されるべきものと通常考えられている[6]。

さらに、歴史学が洗練させてきた史料現象の取り扱い技法は、本質的に「形式論」であったことも重要である。個々の証言のもっともらしさではなく、情報の群としての把握、モノやかたちへの関心、情報や現象間の関係などへの着目は、史料学の成立根拠をなしてきたし、現在でもそうである。また、前近代のテクストが、実務資料を含めて、レトリックをはじめとする諸規則を前提とする、先行する諸権威への参照体系として成立していたこと、そしてそれがゆえに、テクスト批判とは、事実上、間テクスト関係についての注釈として行われてきたという事情もある。

以上を念頭において、史料論と呼びうる研究の方向を探るなら、以下の三つの領域が念頭に浮かぶ。

第一には、史料それ自体の研究である。個々の史料（群）は、歴史情報の単なる「器」ではなく、その存在と機能のあり方、さらには他の史料（群）との間にもたれる関係自体もまた歴史情報である。他方、個々の史料のメッセージは、その存在自体（生成と伝来）のあり方に強く規定されており、ここには、単なる史料批判（個々の史料のメッセージの信頼性の弁別）を超えた次元がありうる。一言で言えば、「史料」についての研究は、歴史補助学、あるいは歴史学「以前」なのではなく、本報告書所収の論文で丹下栄が指摘するように、「史料論」のない歴史学など、本来ありえないのである。

第二に、歴史家は、過去の痕跡として「史料」を認識するが、この際、個々の史料は複合的な歴史現象であり、本来無関係でもありえる多様な歴史情報が、場合によっては一つの物体のなかに堆積しながら、現出、あるいは伝来していることが多い。たとえば、ある

---

[5] 現象学、解釈学から、言語学、さらには社会学にいたる膨大な業績の蓄積があるが、対照的な仕事として、野家啓一『物語の哲学』（岩波書店、1996 年、増補改訂版、2005 年）とハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』（未来社、1985/87 年）を挙げておこう。

[6] たとえば、誤って実証主義の批判者とみなされているかに見えるブロックの『（新版）歴史のための弁明』（岩波書店、2004 年）は、その副題のとおり（métier d’historien）、歴史哲学からはほど遠い内容である。人類学において蓄積されてきた努力が、歴史学にとって貴重なのは、まさにこの意味においてであり、たとえば、川田順造の一連の仕事は、まさに「史料論」そのものである。膨大な数にのぼる著書から、川田順造『人類学的認識論のために』（岩波書店、2004 年）のみを挙げよう。

文書はそのメッセージだけではなく、その生成と受容を可能としているコミュニケーション環境、たとえば、支持体の材質や書体、保管されてきた場所等についても教えてくれる。さらに、トイレの発掘が食事や疾病の研究材料を提供するなど、歴史情報の認識は、歴史家の問題関心と、彼が利用可能な技法の体系に大きく依存している。歴史家は、過去の痕跡の認識（史料化）の多様化と洗練を通じて、より多くの歴史情報を聞き取る努力を重ねてきた。

最後に、堆積する情報の集合体という歴史の性格は、歴史学や史料研究という場においても、まったく同じように働く。すなわち、歴史学もまた、一つのコミュニケーション空間であり、特定の歴史環境のもとで、個々の業績の「学問」的性格が保証されてきた。西欧中世史については、この過程は、遅くとも 17 世紀、場合によっては中世にすらさかのぼるが、歴史家が自明としがちな、学問研究のあり方や方法論自身について、脱構築的な省察が常に必要であろう。

以下、研究動向論文の集積からなる本報告書の序論として、まず研究状況の総攬からはじめ、ついで「リテラシーとコミュニケーション」、「実務史料の生成と機能」、「記憶の管理」の三つの問題を順に整理したい。

１．史料論研究の現在

史料論研究の活況を示唆する第一の要素は、国際化の進展である。古書体学や文書形式学、アーカイヴズ学においては、とりわけ 20 世紀後半に、国際学会の設立や活動の活発化というかたちで進行した。従来のヨーロッパ中心に対して、とりわけアメリカ学界の比重が増したことも顕著な特徴の 1 つであろう。また、以上の動きと連動して、共同研究や国際研究集会が異常なまでに増殖しているが、ここには、学問を取り巻く環境の変容が地球規模で進行していることが、示唆されているように思える。

20 世紀末に進行したいま一つの重要な刷新は、いわゆる情報環境の革命的変容である。情報の電子媒体化は、単に図像や文字情報のデーターベーズ化にとどまらず、その地球規模での共有へと道を開いた。情報化の鍵は、処理技術と同時にコンテンツにあると言われるが、この両方に関係して、テクスト・史料学者は、人文学研究の常に最前線に位置してきたことを忘れてはならない[7]。

他方、70 年代の高度経済成長の終焉が不振を導いた史料刊行事業や史料学研究が、20 世紀末にいたって息を吹き返したかに見える。欧米における高等教育学生数の飛躍的増加が（すなわち、学問の民主化・大衆化が）、逆説的にも、かつては高踏的・保守的として非難されもした史料研究に、多くの人材を供給し、史料に沈潜した学識 érudition への関心が高まっている。さらに、「記憶の場」や読書行為の研究に代表される、20 世紀末の学界を表彰する共同研究が、史料学との協同を不可欠としたという状況も大きい。

---

[7] 以上の状況について、網羅的な検討にはいたらなかったが、本報告書所収の「西欧中世史料学・史料研究に関する文献・情報紹介」では、その一端を伝えることに配慮した。

最後に、日本の歴史学界の状況について、一言しておきたい。

日本と西欧の中世史料学研究は、直接の影響関係が想定されないにもかかわらず、20 世紀末ほぼ同様の問題関心の変容を経験した。それは、端的には、文書形式学（日本では古文書学に該当する）における「様式論から機能論・伝来論」への関心の変容として現われているが、同時に、アーカイヴズ学・史の急速な発展も見逃せない[8]。

他方、20 世紀末、比較史や学際研究が活発化したことも、日本の史料研究の深化にとって重要な要因となったと考えられる。とりわけ、「イスラムの都市性」を嚆矢とするイスラム共同研究は、比較を研究の根幹に据えて、否応なく他領域の研究者を巻き込んだが、そこでは史料にかかわる問題も意識されていた。他方、問題関心と方法論、さらには一見すると現象までも類似するように見える日本と西欧との間では、この間、さまざまな共同研究の努力が続けられていたが、とりわけ熊本大学で開かれた日英中世史料論は、両国の中心的な専門家が対面して、体系的に重要問題に取り組んだ画期的な機会であった[9]。

最後に、同種の問題を取り扱いながら、長らく没交渉状態にあった、歴史学と理論系諸科学との間を架橋する試みが現われ始めている。とりわけ重要なのは、名古屋大学 COE「統合テクスト科学の構築」であろう。ここでは、言語学や解釈学理論が、そのままのかたちで議論・紹介されているばかりではなく、具体的なテクスト読解の妥当性検証というレヴェルで参照されている[10]。

２．リテラシーとコミュニケーション

近年の西欧中世研究を特徴づける動きの一つは、疑いもなく、リテラシーやコミュニケーションをめぐる議論である。本共同研究では、2006 年 3 月に開催した「説教史料論」特集がこの問題を背景の一つとしていた。本報告書においても、城戸論文が中世初期イタリア文書史料研究とのかかわりで、その一端を紹介している。多様な業績が存在するが、ここでは、代表的な動向を簡単に紹介しよう。

古代末期から中世初期に関して、もっとも重要な研究は、バニアールの言語とコミュニケーション研究であり、ラテン語と俗語の対立という問題設定自体を、実践におけるコミ

---

[8] とりあえず、村井章介「中世史料論」（『古文書研究』50、1999 年、33-52 頁）、国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』（柏書房、2003 年）を挙げておこう。

[9] とりあえず、林佳代子他編『記録と表象』（東京大学出版会、2005 年）、鶴島博和/春田直紀「「日英史料論」シンポジウム報告」（『古文書研究』56、2002 年、97-112 頁）を挙げよう。日英史料論シンポジウムは、近々中に集会録が刊行予定ときく。最後に、2004-07 年度にかけて続けられた科学研究費助成共同研究「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」（代表者・渡辺浩一）は、日本、韓国、中国、トルコ、ヨーロッパの研究者をパートナーとする本格的な比較史事業であった。計 5 回にわたって開催された国際研究会については、とりあえず毎年刊行された年次報告書を参照。

[10] 多くの報告書や刊行物のなかから、最終報告書のみを掲げよう。『21 世紀 COE プログラム「統合テクスト科学の構築」最終報告書　統合テクスト科学の地平』（名古屋大学文学研究科、2007 年）。

ュニケーション空間問題として一変させた[11]。カロリング期を中心とする中世初期全般については、ケンブリッジ大学のマッキテリック学派の活躍が顕著である。狭義の史料研究にも取り組む一方で、リテラシー環境を、文化要因のみならず、法制、政治、経済等との関係で包括的にとらえる総合的視野からなる研究が多く発表されている[12]。

他方、おおよそ 12-13 世紀に生じた大きなリテラシー環境の変容について、のちの研究動向に圧倒的な影響を与えたのが、ケラー率いる「文字実践 Pragmatische Schriftlichkeit」についてミュンスター大学共同研究であった。最近では、ユトレヒト大学での共同研究が、さらに多様な課題にアプローチしている[13]。

最後に、文字テクストをめぐる諸問題については、解釈共同体、テクストの形態論、書籍の刊行・流通史など、多様な問題が提起されてきた[14]。とりわけ、読書と読者問題は、「近代国家形成」（13 世紀以降に進行した、権力の稠密化現象と、社会的合意形成の相互依存的同時進行過程の研究。現象的には、王権や都市などの「国家」的枠組みのもとで進行したもので、西欧文明の独自なものとして理解される）[15]との関係でも、重要な議論の焦点となった[16]。

３．実務史料の生成と機能

実証主義歴史学が、「君主鑑」を始めとする教訓や、ロマン主義的な文壇歴史からの訣別を志向して、証拠による証明を旨とする方法学派としてみずからを位置づけたとき、そのもっとも有力な検討材料として立ち現れたのが文書史料であった。個別の意図が働く制作・編纂という色彩の強い記述史料に対して、特定個人や組織の業務の結果として生み出されるがゆえに、より「客観的な」証言（少なくとも。同時代においては、なんらかの拘束力、端的には法的効力を有する）と考えられたからである。結果として、とりわけ権利

---

[11] BANNIARD, M., *Genèse culturelle de l'Europe, Ve-VIIIe siècle,* Paris, 1989; id., *Viva voce. Communication écrite et communication orale du IVe au IXe siècle en Occident latin,* Paris, 1992.

[12] Cf. MCKITTERICK, R., *The Carolingians and the written word, Cambridge,* 1989; id., ed., *The Uses of Literacy in Early Mediaeval Europe, Cambridge*, 1990; id., *History and memory in the Carolingian World,* Cambridge, 2004.

[13] ミュンスター大学およびユトレヒト大学の事業については、本報告書所載の「文献・情報紹介」を参照。

[14] CAVALLO, G. et CHARTIER, R., éd., *Histoire de la lecture dans le monde occidental*, Paris, 1997（邦訳　シャルティエ/カヴァッロ『読むことの歴史』、大修館書店、2000 年）が諸問題を網羅的に提示している。さらに、STOCK, B., *The Implications of Literacy. Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries,* Princeton, 1983.

[15] 80 年代にフランスで開始され、その後ヨーロッパ財団支援の国際共同研究に発展したプロジェクト。多様な動向の集合体であったが、問題関心が先鋭なものとして、GENET, J.-P., La genèse de l'Etat moderne: les enjeux d'un programme de recherche, dans *Actes de la recherche en sciences sociales*, 118, 1997, pp.3-18 を挙げる。.

[16] もっとも重要な研究として、COLEMAN, J., *Public reading and the reading public in late medieval England and France,* Cambridge, 1996. GENET, J.-P., éd., L'*histoire et les nouveaux publics dans l'Europe médiévale (XIIIe-XVe siècles). Actes du colloque international organisé par la Fondation Européenne de la Science à la Casa de Vélasquez*, Madrid, 23-24 avril 1993, Paris, 1997.

証書系史料が、真偽の鑑定とのかかわりから、史料学のもっとも渇望される対象とされてきたが、近年、従来かならずしも体系的な研究の対象とはされてはこなかった他の類型の実務史料、たとえば会計簿、業務日誌などの内部資料に関心が寄せられはじめた。文書史料について共同研究では、2006 年 4 月の「地中海世界の文書」、および同 7 月の「王文書」特集で、とりわけ生成と存在の意味にまつわる諸問題に取り組んだが、本報告書では、丹下報告がやや広い観点から再考している。また、近年飛躍的に研究が進んでいる、中世末期の行政内部資料については、花田論文が、フランス財政史研究の現状を紹介している。

他方、文書史料のかたち、とりわけ外層に対する関心を高めたのが、リュック率いるマールブルク学派の活躍であった。とりわけ、文書伝来数が（おそらくは生成数自体も）少ない中世初期の文書は、材質、レイアウト、サイズ、フォーマットなどが、のちの文書に比べて特に念入りに準備されたと思われるものが多く、有効性保証のための道具（モノグランマ、ロータ、印章など）ともあわせて、文書の物的性格研究の絶好の対象と見なされうる。このような関心は、クリュニ文書群について多くの論文を共同に発表している、アツマ/ヴザンにも看取されるほか、トックの一連の文書史料研究にも色濃い[17]。

しかしながら、文書史料の価値について、とりわけ重要な議論が続けられているのは、封建期についてであり、その評価は、紀元千年論争においても決定的な意義を有していた。この領域では、バルテルミの一連の業績と、1996 年に古文書学校で開かれた研究集会が依然として参照の基礎となる[18]。この問題については、本報告書においては、スペイン学界の状況を足掛かりとして、足立論文が検討している。

---

[17] リュックとマールブルク学派については、本報告書所載の「文献・情報紹介」参照。アツマ/ヴザンの仕事の基礎となるのは、クリュニ文書オリジナルファク・シミレ集である。ATSMA, H., BARRET, S. et VEZIN, J., éd., *Les plus anciens documents originaux de l'abbaye de Cluny, t. II, Documents nos 31 à 60: Paris, Bibliothèque nationale de France, Collection de Bourgogne, vol. 77, nos 33 à 61*, Turnhout, 2000; id.., éd., *Les plus anciens documents originaux de l'abbaye de Cluny, t. III. Documents nos 61 à 90: Paris, Bibliothèque nationale de France, Collection de Bourgogne, vol. 77, nos 62 à 89*, Turnhout, 2002.. トックについては、ARTEM のデータベース研究（本報告書の「文献紹介」参照）以外では、以下の近著が重要である。TOCK, B.-M., *Scribes, souscripteurs et témoins dans les actes privés en France (VIIe - début XIIe siècle)*, Turnhout, 2005. バレの以下の論文も重要な指摘を含む。BARRET, S., Eléments d'institutionalité dans les actes originaux du "fonds de Cluny" de la Bibliothèque nationale de France (Xe-XIe siècles), dans *Die Bettelorden im Aufbau. Beiträge au Institutionalisierungsprozessen im Mittelalterlichen Religiosentum*, hg. von G. MELVILLE, Münster, 1999, pp.557-601.

[18] バルテルミの議論については、とりあえず、彼の学位論文である、BARTHELEMY, D., *La société dans le comté de Vendôme de l'an mil au XIVe siècle,* Paris, 1993.と、紀元千年の変革に関する論文を集めた以下の論文集を参照。BARTHELEMY, D., *La mutation de l'an mil a-t-elle eu lieu? Servage et chevalerie dans la France des Xe et XIe siècles*, Paris, 1997. 96 年古文書学校研究会では、バルテルミも自身が重要な報告を行っているが、他にも重要な論考が多いなかで、ギヨジョナンによる巻頭論文は、問題状況の見取り図を提供する。GUYOTJEANNIN, O., MORELLE, L. et PARISSE, M., éd., *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des Chartes, 1997)*, Paris, 1997.

４．記憶の管理

20 世紀末の歴史学界のキーワードは、欧米においても「記憶と歴史」であった。とりわけフランスでは、「記憶の場」の故地にふさわしく（？）、中世史領域においても多様な議論が提出された。本共同研究では、2005 年 9 月の「カルチュレール」、2006 年 11 月および 12 月に開催した「アーカイヴズ」関係の研究会、シンポジウムが関係の諸問題に取り組む試みであった。

フランス中世史学界において、この問題にもっとも早くから取り組み、のちの世代に圧倒的な影響をおよぼしたのは、疑いもなくグネであり、歴史編纂に関する古典的概論を著す一方、共同研究も組織していた[19]。他方、アメリカ学界において、スピーゲルは、サン＝ドニの歴史編纂研究からはじめて、のちには、方法論的な考察でも積極的に発言するに至っている[20]。さらに、近年、歴史編纂を対象とする国際研究集会が組織される一方で、日本にも本格的な研究者が現われている[21]。

他方で、記憶の問題系は、記述史料以外の領域へも影響をおよぼした。その代表例が、封建社会における修道院の記憶戦略と、アーカイヴズ管理に関する諸問題である。

前者については、本報告書でも森論文と岡崎論文が取り扱うカルチュレール論が一つの焦点となるが、ここではその前提として、ギアリ、ローエルス、さらにはバルテルミ等が提示するような、修道院の多様な機能と戦略全般が重要な論点となっていることを指摘せねばならない。すなわち、貴族家門の形成と記憶の担い手（女性から修道士へ）、生と死の結節点としての教会（墓地や死者記念）、超自然と紛争（聖人崇敬と奇蹟）などである[22]。この文脈では、イオニャ＝プラの教会論研究が、多様な史料類型に目配りしながら行われていることも注目に値する[23]。

---

19 GUENEE, B., *Histoire et culture historique dans l'Occident médiéval,* Paris, 1980. 論文集として、GUENEE, B., *Politique et histoire au Moyen Age. Recueil d'articles sur l'histoire politique et d'historiographie médiévale (1956-1981)*, Paris, 1981. 共同研究の成果として、GUENEE, B., éd., *Le métier d'historien au Moyen Age. Etudes sur l'historiographie médiévale,* Paris, 1977; GENET, J.-P., éd., *L'historiographie médiévale en Europe. Actes du colloque organisé par la Fondation Européenne de la Science au Centre de Recherches Historiques et Juridiques de l'Université de Paris I du 29 mars au 1er avril 1989*, Paris, 1991.

20 SPIEGEL, G., *The Chronicle tradition of Saint-Denis: a survey,* Brookline, Mass., 1978; id., *Romancing the past : the rise of vernacular prose historiography in thirteenth-century France*, Berkeley, 1993; id., *The Past as Text. The Theory and Practice of Medieval Historiography*, Baltimore/London, 1997.

21 もっとも新しい研究として、鈴木道也「『フランス大年代記』とナショナル・アイデンティティ—歴史叙述研究を巡る最近の動向から—」（『西洋史研究』新輯第 36 号、2007 年、21-41 頁）を参照。この論文では、「中世年代記」国際研究集会についても、包括的な情報が提供されている。

22 GEARY, P. J., *Phantoms of Remembrance. Memory and oblivion at the End of the First Millennium*, Princenton, 1994; LAUWERS, M., *La mémoire des ancêtres. Le souci des morts. Morts, rites et société au Moyen Age*, Paris, 1997; id., *Naissance du cimetière. Lieux sacrés et terre des morts dans l'Occident médiéval*, Paris, 2005; BARTHELEMY, D., *Chevaliers et miracles. La violence et le sacré dans la société féodale,* Paris, 2004.

23 IOGNA-PRAT, D., *Etudes clunisiennes*, Paris, 2002 にまとめられた諸論文を参照。

最後は、アーカイヴズ管理についてである。カルチュレールは、たとえその「記憶の操作」の契機を考慮すべきとしても、本来的には「実務」的性格を有することがしばしば強調される。しかしながら、問題は、この「実務」や「業務」自体、さらにはその記録化と伝来という現象は、単に「現実の客観的な反映」ではなく、それ自体を歴史情報として研究せねばならないことである。具体的には、古典的な問題関心であった、資料とそれを生み出す制度との関係（広い意味での制度史研究の一環）のみならず、資料の物理的配架、整理秩序の形成、史料保存に関して働く選別の論理などの諸問題が想起され、これらは、「しごと」自体の存在論とその自己認識の研究へとつながる射程を有している。

文書管理の具体相については、カルチュレールに関する研究集会でも課題として掲げられ、その後も、研究集会の開催や、いくつかの業績があるとはいえ（モレルの一連の研究や、パリッスが注意を喚起したパンカルト研究など）、本格的な個別研究は、かならずしも多くない[24]。そのなかで、ギヨジャナンが本格的に取り組んでいるサン＝ドニ修道院およびフランス王権、ならびにバレによるクリュニ修道院研究は、モデルとなる重要な個別研究である[25]。

おわりに

文化現象としてのテクストについて、学界や世間の無関心がなお続いていたころ、一人の研究者が、9-12 世紀のカタロニアを対象に地道な研究を続けていた。1992 年に完成した彼の学位論文は、その後未刊行のままであったが、2003 年にいたって大部の二分冊として刊行された。ジメルマンの『カタロニアにおける書くことと読むこと』がそれである[26]。この著書は、近年の問題関心や、対象とされた地域についての他の研究との関係では、さまざまな問題をはらんでおり、また著者の個性が強く反映された一つの「作品」としての完成度を誇っているが、このこと自体、20 世紀の最後の数十年の学界のあり方と変容を表しているとも言える。史料論研究が、単なる歴史補助学ではありえない実例の一つであると

---

[24] カルチュレールについては、本報告書所収の、岡崎「記憶の管理とカルチュレール」を参照こと。さらに、Fabrique des archives, fabrique de l'histoire, dans *Revue des Synthèses*, 5e sér., 125, 2004 所収の諸論文も参照。

[25] 代表的な論文として、GUYOTJEANNIN, O., La science des archives à Saint-Denis (fin du XIIIe - début du XVIe siècle), dans *Saint-Denis et la royauté. Etudes offertes à Bernard Guenée*, éd. par F. AUTRAND, C. GAUBARD et J.-M. MOEGLIN, Paris, 1999, pp.339-353; id.. Les méthodes de travail des archivistes du roi de France (XIIIe - début XVIe siècle), dans *Archiv für Diplomatik,* 42, 1996, pp.295-373; BARRET, S., *La mémoire et l'écrit: l'abbaye de Cluny et ses archives (Xe-XVIIIe siècle)*, Münster, 2004.

[26] ZIMMERMANN, M., *Ecrire et lire en Catalogne (IXe-XIIe siècle),* Madrid, 2003. 2 vol. 重要な書評として、CHASTANG, P., La langue, l'écriture et l'histoire. La singulière Catalogne de Michel Zimmermann, dans *Médiévales*, 52, printemps, 2007, pp.171-180; MORELLE, L., Michel Zimmermann: l'écriture documentaire comme théâtre d'expérimentation, dans *ibid.*, pp.181-196. さらに、彼が主宰した研究集会の会議録として、ZIMMERMANN, M., éd., *Auctor et Auctoritas. Invention et conformisme dans l'écriture médiévale. Actes du colloque de Saint-Quentin-en-Yvelines (14-16 juin 1999)*, Paris, 2001.

ともに、テクスト現象と他の歴史現象との関係を議論することの困難さも痛感されずにはおかない。

本報告書は、先人の努力のあとを追跡、整理することで、それらを学界の共有財産とし、問題関心と発想への刺激と、方法論の洗練のための一助となることを期待して編集された。各論文は、それぞれの執筆者がもっとも馴染んでいる領域について、それぞれのスタイルで書かれている。読者の関心に合わせて、拾い読みも可能であるが、全体としては、相補い合う関係にあるともいえる。本報告書が、日本における史料論研究発展ための一里塚ともなれば、とりあえずの目標は達せられたことになろう。